

田上 時子のエッセイ

アメリカ移民 曾祖母と大叔父

今年1月渡米した折に、満100歳になる大叔父をサンフランシスコにある老人ホームに訪問した。大叔父と言っても正確には祖父の異父弟、車椅子生活ながら今も頭脳明晰。カッコよい100歳だ。

田上は母方の姓だが、その曾祖母は、大日本帝国海軍の軍人で大酒飲みの暴君であった夫に三行半をつきつけ、二人の子どもを残して一人実家に戻った明治の女。実家が移民の多い和歌山にあったからか、どういう経緯があったのか知る由もないが、暫くして「写真花嫁」としてアメリカに先に移民していた福島氏の元に嫁ぎ、一男を身ごもった。それが福島吉富大叔父である。

1910年以前に渡米した移民の多くは独身男性であり、妻を迎えて家族を作りたいと望んでも白人女性と結婚することは言語や文化背景の壁があり難しく日本女性を望む者が多かった。かといって帰国して妻を娶うという経済的余裕などない。そこで仲人を間に立て写真だけを交換して入籍し、花嫁を呼び寄せる写真結婚システムが出来上がった。

まさか自分の曾祖母が写真花嫁だとは知らずに、写真一枚だけで結婚相手を決めアメリカという文明の国に大きな夢を抱いて渡米した写真花嫁たち取材していた時期がある。

カナダ在住29歳の頃、ニューヨークでビデオ作家として活躍する津野敬子さんの声かけで日系人の歴史100年のドキュメントビ

デオ” Invisible Citizens “(見えない市民制作1983年)の制作班に加わった。サンフランシスコとロサンジェルスを拠点に2年がかりで日系移民100年を取材した。第二次世界大戦勃発後、日系人だけが強制的に收容された場所にも行き、移民一世にも会って話を聞いた。その取材中に写真花嫁たちのことを知ったが、最終的には、男性に比べて完結する物語を持つ写真花嫁の女性を取材できなかったのが理由で、ドキュメントの主人公は男性だけになった。

吉富大叔父に初めて会ったのはそのずっと後で、曾祖母が写真花嫁として渡米したということを知ったのは、そのまたずっと後日本に帰国してからである。運命のいたずらというか、交差するはずの糸は有数にありながら交わったのはやっと最近である。

明治という時代に、自ら離婚を言い渡し、新たな人生をアメリカという異国で生きることを選んだ曾祖母の勇気と苦労は並大抵ではなかつたらうと想像する。外国生活は簡単ではない。文化の違いや言語の壁が立ちふさがり、加えて今と違い排日の嵐が荒れだした最中であつた。時空を超えて曾祖母に想いを寄せる昨今である。

